

Title	波多野鼎著 景気論
Sub Title	
Author	小高, 泰雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.1 (1935. 1) ,p.95- 97
JaLC DOI	10.14991/001.19350101-0095
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350101-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「本書はこの夏試みた一聯の講演の草稿に加筆したものである。今日世界を通してあらゆる社會層の興味を中心となつてゐる景氣の問題についての、著名な諸學者の理論を平易に解説批評することを目的としてゐる。謂はゞ景氣論への入門書である。諸々の理論がたゞ断片的にしか紹介されてゐない我國の讀書界に對しては、多少の意義があるかと思つて公刊する次第である。景氣論の嚴密に學問的な研究批判は近く他の形で發表する著作について見て頂きたいと思ふ」これが著者の巻頭によせられた言葉である。洵に教授の述べられる通り我國に於いては、著名の景氣理論が断片的にしか紹介論評せられてゐないのであつて、この問題に興味を有つものは、誰れしも進んで、これ等の諸理論を綜括し、其の理論的關聯を簡明にした著書を渴望してゐることであると思ふ。かゝる要求を察知せられ、教授が後に來るべき一層學問的な景氣理論の完成への素地として本書を公にせられたこと頗る有意義なことであると思ふ。入門書である限り、私は、本書を繕くに當つて、(一)諸理論の簡明な紹介と、(二)諸理論間の大方の關係及資本主義發展との理論的關聯に對する若干の暗示の與へられる期待を以つてしたのである。而して、第一の點に就いては其の期待は十分に滿されたのである。即ち、教授がこゝに載せられてゐる諸理論家だけに就いては

波多野鼎著「景氣論」

小 高 泰 雄

「本書はこの夏試みた一聯の講演の草稿に加筆したものである。今日世界を通してあらゆる社會層の興味を中心となつてゐる景氣の問題についての、著名な諸學者の理論を平易に解説批評することを目的としてゐる。謂はゞ景氣論への入門書である。諸々の理論がたゞ断片的にしか紹介されてゐない我國の讀書界に對しては、多少の意義があるかと思つて公刊する次第である。景氣論の嚴密に學問的な研究批判は近く他の形で發表する著作について見て頂きたいと思ふ」これが著者の巻頭によせられた言葉である。洵に教授の述べられる通り我國に於いては、著名の景氣理論が断片的にしか紹介論評せられてゐないのであつて、この問題に興味を有つものは、誰れしも進んで、これ等の諸理論を綜括し、其の理論的關聯を簡明にした著書を渴望してゐることであると思ふ。かゝる要求を察知せられ、教授が後に來るべき一層學問的な景氣理論の完成への素地として本書を公にせられたこと頗る有意義なことであると思ふ。入門書である限り、私は、本書を繕くに當つて、(一)諸理論の簡明な紹介と、(二)諸理論間の大方の關係及資本主義發展との理論的關聯に對する若干の暗示の與へられる期待を以つてしたのである。而して、第一の點に就いては其の期待は十分に滿されたのである。即ち、教授がこゝに載せられてゐる諸理論家だけに就いては

洵に平易簡明であつて、後進の學生にして、若し、これ等諸理論家中の一人の所論を採り上げて論じやうとする場合、先づ其の全貌を観察するには、こよなき手引書たるを失はぬと思ふ。然し、第二の點に就いては、いさゝか慾を述べたい餘地が存する様に思はれる。教授は先づ第一篇に於いて正統派の調和的恐慌理論と、其の批判としてのマルサス、シスモンディの恐慌理論を對立せしめてゐるが、後者の恐慌理論の完成としてのマルクスのそれを全然省略してゐるのは何故であらうか。私は景氣論の研究に於いて恐慌論的方法是マルクスに於いて最もよく表明せられ、然も、後に來るべき循環論的方法に對してはツガンを通して重大な影響を與へてゐることと思ふ。勿論マルクス説が頗る難解であり、殊に其の表式的説明が往々初學者を迷路に陥れる懼れあるとしても、それは毫も其の重要性を閑却する理由たり得ないと思ふ。

著者は第二編構造的景氣論、第三編貨幣的或は信用的景氣論として所謂景氣循環論を論評してゐる。而して、景氣循環論である限り、シユグラの立場は一應紹介に値すべきものではなからうか。著者はシユグラを以つて、單に「好景氣の原因は不景氣であり、不景氣の原因は好景氣であるとハッキリ斷定したに過ぎぬ」として、全然其の内容に觸れられぬ。然し、私は、かく述べることに循環論的行き方を示してゐる重要なものがあると思ふ。進んで彼の景氣局面の分析は後の學者に對して影響する所大であつたと思ふ。

構造理論を分けて「資本説」と「購買力説」となし、前者にツガン及シユビートホフ後者にホブソン、ブニアチン、レーデラーを検討せられてゐることは、一般に賛成せらるる所である。更に貨幣的或は信用的景氣論に於いて、フィッシャー、シモンベーター、ハーン、ホオトロー、ケインズ等を述べられてゐることも無理なき順序であらう。レーデラーやシモンベーターが生産、流通孰れを重視してゐるかに就いては、一般に惑ふ所ではあるが、著

者も述べて居られる通り、「元來統一的な個性を有つたそれで(ぞれ?)の理論を若干の型にはめて分類すること自體が無理な仕事であるから、多少の不合理の生ずるのは止を得ないであらう。」(九三頁)唯貨幣的景氣論に於いて、ヰキセル、ミーゼスの所論を顧みられることが必要ではなかつたかと思ふ。私は、更に、何等の形に於いて、ピターの心理的景氣論が採り入れられることを欲するものである。著者の謂ふ如く、「徹底した極端な理論の中には、所謂中庸を得た妥協的な理論が見落し勝な真理が含まれてゐるのである。」(一六八頁)ピターの見解は一見頗る極端に考へられるけれ共、然も、其の内容をよく検討して見るなれば、頗る総合的なものであり、私は尠くとも、其の理論は、循環論的方法に於いては、最も高く評價せらるべきものの、一に擧げらるべきであると思ふ。

世界恐慌前後よりして、循環論的景氣論が現實に妥當せざるに至つたことは、何人も認めざるを得ない所であり、これに代つて、所謂長期波動説が、一層重要な景氣論として唱導せらるるに至り、カッセル、シモンベーター、コンドラティエフ、シミアン等の所説が、重視せられる以上、これ等の説論に就いても一應考慮せられたならば、本書の價値は愈々高きを加へたであらう。兎に角、この方面の勞作の尠き今日入門書としての本書の意義は充分に存するものであり、我々は進んで、教授の約束せられる「嚴密に學問的な研究批評」が發表せられる日の近からんことを希望するものである。(菊版二二七頁、定價二圓、千倉書房)